

冬の自然と子ども

岡田恵子



北海道の南端にある函館は、東と西を海にはさまれ湾に突出している街、冬の気候の特色と言えば、海風にさらされることだろう。気温はマイナス十度前後、でも風の冷たさが肌身しみて来る。「シバレ」が強く感じられる。十二月に入って降る雪は、風に吹きとばされる量が多いのか、根雪となって積るのは、クリスマス頃の頃からになる。幼稚園で本格的な雪遊びができるのは、冬休みあけの一月末となる。

初雪の頃

子どもは雪が大好きだ。雪がちらちら落ちて来ると、「雪だ、雪だ」とガラス戸にかけ寄り、顔を押しつけて眺めている。元

気のよい子とはび出して行って掌に雪を受けている。「先生、雪だよ」と室内に入ってきて来る頃には、もう暖かい掌の上は一面の水滴になり変わっている。雪から水の変化、何とかして元の姿のままの雪を見せようと、くり返しているが、なかなか思い通りにはいかない。手の方が先に冷たくなってしまふ。他の子が、「洋服についているよ」というヒントから、そこらにある「物」に雪を受けることを考えついたりする。

戸外あそび

青空の広がった、風のおだやかな日は、一斉に外あそびだ。先ず身仕度。帽子から長靴、頭の中から先まで、教師間用語として「完全武装」と言う。

先頭の長靴がポツ、ポツと雪に穴をあけると、その穴どおりたどったり、横にまた穴をあけたりして続いていくと、それ迄白一色だった庭に、無数の靴あとが、抽象画のようにみえる。

前夜冷えこんで、雪の表面が薄い氷の状態になると、穴あけ競争だ。穴の深さ、大きさ、いくつあけたか、園庭の隅々まで足跡をつける。

寒さがきびしいと雪はサラサラしていて、なかなか固まらない。握っても手袋につく分量の方が多い。

「先生、雪玉をつくって」と固まらない雪にもどかしさを感じずるようだ。

二月中頃より暖気にあると、待望の「雪たるま」ができるようになる。小ささまさまの雪たるまや、重ねられなかった雪の大玉が並ぶ。

樞あそびも楽しみの一つ。交通量が多い最近では、幼児だけで充分楽しめるのは、園庭だけではないだろうか。この頃になると、何人かで「そりのリレー」「のりものごっこ」のような形でルールを作って遊ぶ。「貸してくれない」「のせてくれない」等の訴えは余り聞かれない。このような遊びも、せいぜい二十分から三十分、天候が変わったり、寒くなったりで室内に入ってしまうことになる。

保育室で

室内に張り渡された紐に、外遊びで濡れた帽子、コート等が取り付けられる。ストーブのまわりには長靴がならべられ、ほんのりとした湯気をあげる。何ともアットホームな雰囲気がか

もし出される。

ストーブをかこみ、お話を聞いたり、本を読んだり、冬ならではの経験であろう。火があることは人間を落ち着かせるのか？ それとも恐れがあるのか、今まで火気の傍での事故はない。外は真白な雪、その雪を眺めながらの保育、雪を拒否せず、とり入れる保育、寒さに打ち勝つ体力をつけていきたい。

お母さんへのねがい

心臓を刺す風の冷たさ、子どもはか弱いものと考え親の配慮か、十一月に入ると長ズボン、もも引き等が目について来る。厚着をする。子どもたちは頬を赤くして汗ばんでいる。大人の感触でなく、子どもの状態をよくみて衣服を調節して欲しいことを実行して来た。その結果がこの冬に少しでも良い方向に現われてくれることを期待しながら。

「雨にも負けず、風にも負けず」北海道では「雪にも負けず、シバレにも負けず」、そんな強い子に育って欲しいと願っている。

(函館・日吉幼稚園)